

図 書 紹 介

南亮三郎編：マラヤ・シンガポールの人口構造，アジア経済研究所(東大出版会発売)，1963. 東京，283頁.

本書は中央大学経済学部の南亮三郎教授を中心とした数氏によって執筆せられた著書で，東南アジアに関する著書として近来稀に見る充実した読みごたえのある書籍である。編著であるから多少の重複なしとしないが，分担執筆としてはよく統制がとれている。大体次の如き諸章と執筆者より成っている。

第一章 マラヤの経済，社会および地理的概観（吉田忠雄氏）

第二章 マラヤ連邦人口の再生産構造（大淵寛氏）

第三章 マラヤ人口の基本構造（岡田実氏）

第四章 マラヤ連邦の人口移動（小林和正氏）

第五章 マラヤ連邦人口の社会的構成（同 氏）

第六章 マラヤ連邦人口の経済構造（石南国氏）

第七章 シンガポールの人口構造（鈴木啓祐氏）

この外に南教授による総括と関係文献目録が附加されている。

周知のようにマラヤは比較的人口統計の多い国であるが，本書が中心的に分析しているのは1957年のセンサスであり，何れの章に於ても，きわめて多数の図表をおさめていて，現在のマラヤを知るための不可欠の文献となっている。第一章では人口分析に先立って必要なかぎりの人口背景を明らかにしようとしており，マラヤ連邦とシンガポール，マラヤの人口史，マラヤの地理的環境等の諸節をおさめている。第二章からが人口分析で人口の再生産構造の分析にかなり専門的な人口論の立場が示され，第三章のマラヤ連邦人口の基本構造では，男女別構造，年齢構造，配偶関係構造が取扱われている。第四章マラヤ連邦の人口移動では，国際人口移動，国内人口移動の傾向を示し，第五章マラヤ連邦人口の社会的構成ではマラヤの民族構造，社会文化的人口構造を明らかにしている。第六章マラヤ連邦人口の経済構造では労働力人口，産業構造，就業構造を示している。第七章はシンガポールについて略上記の分析の方向に従って，マラヤ連邦に対応して取扱っている。

評者は本書が若い学徒による真摯な努力の所産であ

り，マラヤ研究に志す者にとって必読の文献であることを認めるにやぶさかでないが，読み進む中若干気づいた点について一言しておきたい。

まず地名の読み方である。例えばセランゴール，ネグリセンビラン，ケランタン等のよみ方が本書ではずっと使用されている。然しマライ語ではもちろんスランゴール，ヌグリスンビラン，クランタンである。普通の英語読みも結構であるが，日本のマライ研究家の間で何とか統一することはできないものか，これは批評ではないが提言しておきたい。然し英語読みにしても Semang（セマング），Klang（クラング）式の読み方（p. 15, 142, etc.）は一寸困るので，Pahang（パハン）と読んであるところもあるので（p. 31）後者の如く統一して頂くのがよいのであるまいか。

マレーシア連邦が1963. 8. 31に発足することになったが，「このマレーシア連邦の構想によれば，人口の人種別割合で中国人人口は第1位を占めるが，全人口の過半数は制し得ないことになる」と述べながら，なぜ統計が示されなかったのであろうか，本書の如き性質の書物としてはやや惜しい気がする。

マラヤは plural society であるとは外国の著書にも屢々見えているが，本書では複合社会とされている。然し複合形成など plural society の意味とは全く逆な用語法もあるので，これはやはり複数社会として頂く方がよくはあるまいか，マライ人，中国人，印度人の間に社会的距離が大きくて，互に自律的社会生活を送るというのが plural society の意味内容であるからである。

モノカルチャーという言葉も説明が不十分であるように思うので，この点の内容的な教示も必要だと思う。

中国人につき記されている個処で（pp. 139-143）州別中国人郷土集団の順位など記されていて有益ではあるが，これについては例えば福建人，広東人，海南島人などは夫々いかなる職業に従事する傾向があるのかを示されないと内容がよく理解されない憾がある。

人種と民族という節が設けられて，人種や民族の一般論がかなり綿密に述べられているが，全体を通観すると，この節はやや異質の観を脱れない。註記する

か、もう少し簡単にみればよかったのであるまいか。

政治的統計、ことに投票状況などに就ては統計があるので、これも示して頂きたかったし、宗教に就ても項目はあるが統計が示されていない。例えば印度人と言ってもヒンズーとは限らないので、こう云う点の統計も多少古くとも示しておいて頂くと参考になる。

この種の書物は一般にすぐ古くなる憾みがある。1963年出版のかなり統計を使った OoiJin-BeeのLand, People and Economy of Malaya など本書に参照することは時間的に無理であったと思うが、今後も煩をいとわず補正して頂くことをお願いしておきたい。

(棚瀬襄爾)

荻原弘明：マンナン・ヤーザウィン第五部・第六部，鹿児島大学文科報告第十号史学篇第七集，1961年同第十二号第九集，1963年。

mnan māha jazāwin dōji: は、1920年刊の Kounbaunshē? māha jazāwin dōji: と共に、原語によって書かれたビルマ年代記の中では、最もまとまったものであり、ビルマ史研究家にとって、必読の書と言う事ができる。

この年代記は、コンバウン王朝の第七代国王バジードの命によって、1829年に、僧侶、婆羅門、王宮高官等の手によって、編纂されたものであるが、内容の大半は、十八世紀初期に、u:kala: によって書かれた māha jazāwin ji: に依拠しているといわれる。

「南方史研究Ⅲ」の中で、既に、訳者によって指摘されているように、従来、この年代記については、英訳及び仏訳が、知られていた。しかし、いずれも、完訳ではない。

今回の荻原氏の労作は、本邦初訳であるばかりでなく、英仏両訳本に欠けている部分をも、補おうとする意欲が認められ、その全訳が期待される。

鹿大文報告十の七と、十二の九に発表された第五部及び第六部は、原典第一巻の146章から150章までと、151章から161章までとに、夫々相当する部分の邦訳である。ビルマ史の上では、バガン王朝の中期から末期まで、ピンヤ・サガイン両(シャン族)王朝、インワ王朝、ハンタワディ(モン族)王朝の一部等に、該当する。訳文には、前記英、仏両訳本との対照結果に基づき詳細な註、及び元史、元史綱目、元史征綱録等中国側の文献による対照も行なわれていて、読者の理

解を、便ならしめている。

ここで、訳文について、若干の批判を呈したい。訳者は、東洋史、特に、ビルマ史の専門家として、深い知識を有しておられるが、訳文を、原文と対照してみると、全体に恣意的な訳が多いという印象をうける。殊に、訳語が不統一で、甚だしい場合には、原文の一単語に対して、四つの訳語が用いられている場合さえある。例えば、mein:maŋe に対する訳語として、〈女の子〉、〈娘〉、〈若い女〉、〈若い侍女〉の四形の使用が、認められる。

いかなる翻訳にも、つきまとう現象であるが、原語の忠実な訳だけでは、訳語としての流暢さに欠ける場合が、少なくない。従って、原文と訳文との間に、或る程度、訳者の主観的操作が加えられる事は、止むを得まい。しかしながら、「マンナン・ヤーザウィン」が、外国文学の翻訳ではなく、歴史的資料の翻訳を意図するものである以上、そのような恣意は、排除されるべきでは、なかろうか？ 訳語や、訳文の表現形式は、常に、原文原語との間に、一定の対応関係を、保っているようにする事が、望ましい。

とはいえ、今回の翻訳は、誠に画期的な労作であり、ビルマに関心をもつ一人として、その早急な完訳を切望したい。

(大野 徹)

Lehman, F.K.: The Structure of Chin Society. The University of Illinois Press, Urbana. 1963. pp. xx+244

本書はイリノイ大学の research associate である著者が1957年2月から1958年8月にわたり、ビルマ西部の丘陵地帯でおこなったチン族の文化人類学的調査にもとづいて書いたものである。チン族は西ビルマからインドのアッサム州、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯にかけて分布する山地民であるが、本書ではビルマ領のチン族に研究の焦点が当てられている。

内容は 1 Habitat, Identity, and History of the Chin, 2 Chin Land Use and Agriculture, 3 Land Tenure and Inheritance, 4 Southern Chin Social Systems, 5 Northern Chin Social Systems, 6 Aspects of Northern Chin Economics, 7 Some Conceptual Structures in Chin Religion, 8 Chin Attitudes and Psychological Orientations, 9 Recent Social and Cultural